法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

編集後記

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
21
(開始ページ / Start Page)
72
(終了ページ / End Page)
72
(発行年 / Year)
1968-06-29

編集後記

先日、総会準備の常任委員会の席で、二部の授業中にもかかわらず、ガンガン響いてくる学生自治会のマイクに辟易しながら、同期のY君のひたいの上に、三日月型の傷がいまもはっきり残っているのを見つけた。

もう八度目の六月十五日を迎える。60年安保の時、最高学年だったわたしたちは、いま30代に足をふみ入れつつある。いったい、この八年間にわたしたちは何を学んだろう。ふりかえって、何一つ新しい状況の突破口を切り拓けなかったのではないかという思いにとらわれる。

フランスもまた、五月の季節の後、青年労働者、学生を置き去りにして、総選挙を迎える。「党」もまた議会へ帰っていった。思えばなんと日本の60年安保後の状況と似ていることか。畢竟、わたしたちはいらだつ思のまま、〈中年〉へ身をしずめていかなくてはならないだろう。（糸井　久）

▼国文学会総会もすんだ。ことしは、従来、前日の土曜日にしていた卒業論文発表会を、同じ日曜日に、総会と平行してやった。総会の方の議事終了後、合流して多数の学生諸君に、大会の研究発表を聞いてもらうためである。この企て、賛否両論あったが、来年もくふうして、なんとか多数の学生会員に大会発表を聞いてもらえるようにしたい。

ことしの発表は例年にもまして粒揃いの感があった。国本治雄氏の発表分は原稿化して本号に掲げた。

昨年秋からことしはじめにかけて学内で激しい動きかみせた学生運動は、今は平静。他大学は揺れに揺れているが、法政では時々、セクト間のいさかいがある程度。学生諸君、遠いところ、大局を見てほしい。理論闘争、結構。どうか、セクト同士の対立による、なかまうちの腕力沙汰だけはやめにしてほしい。声を大にしてそう叫ばずにはいられない。（益田勝実）

▼国文学会総会もおわり、42年度編集委員としてはこの21号が最後となる。現在大学院在学中のすぐれた執筆者を得たことは、大変にしあわせであった。講座がなくなってしまったのは残念であったが、次号からは再び復活するであろうことを予告しておこう。

ところで、近年、法政大学のまわりにも、背の高い建物が多くなり、だんだん視野がせばめられてきている。五、六年前とくらべると大変な変りようだ、と思う。いつのまにか、それにならされて、視野の狭くなったことに気づかなくなってしまう。自分の頭の中も同様で、年と共に狭くなってきているのではないか、と恐ろしくなる。

わたしたちの「誌要」が幅広い視野をもちつづけるためには、できるだけ多くの方からの寄稿を期待しなくてはならない。次年度委員になり代ってお願いしておく。（片桐登）

一九六八年六月二九日発行

日本文学誌要　第二一号

編集　法政大学国文学会

印刷　東京都中央区銀座東三ノ七
東銀座印刷出版株式会社
電話〇三(542)三九四一～五

発行　東京都千代田区富士見町二ノ一七法政大学大学院内
法政大學國文學會
電話代表〇三(262)二三五一
振替　東京六九四三